「文化は政治よりずっと大切なものだ」
――ウリツカヤ、アクーニン、マカレヴィチに聞く――

モスクワ、2014 年 9 月

聞き手　沼野充義*

*マカレヴィチとのインタビューのみ　沼野充義＋楯岡求美

翻訳　奈倉有里・楯岡求美

ウクライナ危機の勃発以来、欧米からの非難をむしろバネにするようにロシアではプーチン大統領支持率が高まり、愛国心や反米感情が盛り上がってきた。クリミア併合問題や、東部ウクライナでの軍事衝突といった話題はマスコミでも大きく報道されてきたが、その一方で、そうした事態を背景に、言論に関して憂えるべき状況がロシア国内で展開していることは、あまり知られていない。そういった状況がかなり禍々しく見え始めた 2014 年 9 月初旬、モスクワで「渦中」のロシア文化人 3 人（いずれも現代ロシアを代表するような作家・音楽家である）に次々に会って、インタビューし、直接彼らの声を聞くことができた。

私はもともと政治的な人間ではなく、こういった問題について政治的な立場から裁断することは好まない。私にとって事は政治ではなく、むしろ言葉と芸術の自由に関わる。そこで、思い切って、モスクワでの見聞をもとに、現代ロシアの言論状況について『朝日新聞』に寄稿させていただくことにした（「ロシア文化人　勇気の異論――ウクライナ紛争の陰で」2014 年 9 月 23 日夕刊）。もう 40 年近く、ロシア文学に関わってきたのに、いまこの問題について何か言うことができなければ自分の人生に意味はない、とまで（と言うとちょっと大げさに聞こえるかもしれないが）思っての決断だった。

なお、この文章を書いている時点（2016 年 2 月末）で、インタビューをしてからほぼ一年半が経過しているが、その間に事態が好転したとは言えない。ウクライナ情勢は国際政治の駆け引きの中で解決の糸口が見いだせず、ウクライナという国の明るい未来もまったく見えてこないし、ロシア作家たちの苦境はむしろより深刻になったとも言える。アクーニンはインタビューの直後、国外に出て以来、ロシアに戻れない（戻りたくない）まま、事実上、半ば亡命状態が続いている。ウリツカヤはロシア・ペン・センター（*PEN International* [国際ペン] 公式加盟組織）の副会長職にあって、組織の人権擁護運動を活発にしようと尽力したが、アンドレイ・ビートフ会長を筆頭とする執行部から攻撃されて 2014 年末、副会長職を退くことを自ら宣言し、その後ロシア・ペン・センターそのものにも見切りをつけて退会した。ロシア・ペン・センターではその後も内紛が続いて現在に至っている。

(沼野 充義)

リュドミラ・ウリツカヤとのインタビュー

リュドミラ・ウリツカヤ Людмила Улицкая

1943 年生まれ、ロシアの作家。モスクワ大学（遺伝学専攻）卒。『ソーネチカ』（沼野恭子訳、新潮社）で一躍国際的な脚光を浴び、2001 年には『クコツキイの症例』（日下部陽介訳、群像社）でロシア・ブッカー賞受賞。その他の邦訳のある著作に、『通訳ダニエル・シュタイン』（前田和泉訳、新潮社）、『それぞれの少女時代』（群像社、沼野恭子訳）、『子供時代』『女が嘘をつくとき』（ともに沼野恭子訳、新潮社）、『陽気なお葬式』（奈倉有里訳、新潮社）がある。現代ロシア文学を代表する作家の一人。

——近々リヴィウ[1]に行かれると聞きましたが、このような状況下でウクライナへ行くのは大変ではないですか。

ウリツカヤ　そうですね、リヴィウのブック・フェスティバル主催者は、今回ロシアの出版社の招待を見合わせています。ロシアでもウクライナでも、人々は気が立っています。それは無理もないことですが、「ロシアの本など買えばそのお金が巡り巡って弾丸を買うお金になり、その弾でウクライナ人が死にかねない」と考える人もいます。しかしそんな状況のなか、私は招待されました。作家として、またロシア・ペンクラブを代表して[2]現地に行くことになります。

——しかし最近は、例えば歌手のアンドレイ・マカレヴィチがウクライナでコンサートをしただけでバッシングを受けるなどの問題が起きています。ウクライナへ行ったことで今後、嫌な目にあう危険性はありませんか。

ウリツカヤ　ええ、でもマカレヴィチと同じで私も既に——8 月末に、例の肖像が張られてしまっています[3]。ご存知だと思いますが、大きな書店ビルの壁全面を覆う巨大な垂れ幕でした。

——あれはいったい誰がやったんですか。国粋主義者か、どこかの政党でしょうか。

ウリツカヤ　ナシスト——プーチン親衛隊とも呼ばれる若者の集団がいます[4]。彼らかもしれませんが、違うかもしれません。誰がやったかなんて、私にはどうでもいいことです。けれど少なくとも政府側の人間が関与していることは明らかです。モスクワの中心地に、特定の人間の肖像を載せて「これがフンタ[5]の首謀者だ」と書いた巨大な垂れ幕をかけるなんて、政府の容認なしにできることではありません。

——あなたのほかには誰が描かれていましたか。

ウリツカヤ　マカレヴィチ、シェンデローヴィチ〔作家、ジャーナリスト〕、レフ・ルビンシュテイン〔詩人〕、ディアナ・アルベーニナ〔歌手〕です[6]。まったく不条理な状況になってきています。そもそも「スパイ、裏切」とは本来、なにか国家機密を握っていてそれを敵に売り渡すとか、そういう行為を指す言葉で、それをなんの機密も知らない私に対して用いるのは見当はずれです。「フンタ」にしても軍事的な陰謀を指す言葉でしょう。そういった言葉が見境なく、純粋に言語学的にみても間違った使われ方をしています。

——あなたへの批判が強まったのは『シュピーゲル』誌への寄稿がきっかけでしょうか。[7]

2014年8月末、モスクワ最大の書店の一つ、「ドーム・クニーギ」の大通りに面した外壁に張り出された垂れ幕。似顔絵は、左上から下に、ウリツカヤ、シェンデローヴィチ、右上から下に、ブイコフ、マカレヴィチ、アルベーニナ。「誰の金で生きているんだ？」という言葉があり、彼らが外国に買収された非国民だというデマ宣伝をしている。5月初旬の同様の垂れ幕には、アクーニンの顔写真もあった。

ウリツカヤ　そうです。あれはまず外国語で発表され、その一部をロシア語に翻訳したものが報道されました。しかしその翻訳があまりにも不正確で誤解を招くと思ったので、私は自分からロシア語の原文テキストを新聞社や雑誌出版社に渡したのです。直後は、さほど大きな問題にはならなかったと思います。ＲＩＡノーヴォスチ社がインタビューを申し込んできたのに直前でキャンセルされた、なんていうことはありましたけど。私は怒りっぽいほうではないので、特に何とも思いませんでした。むしろ、取材を申し込まれたときのほうが驚きましたね（笑）。

ともかく私は普段から、落ち着いて適正な判断を下せるように心がけています。さきほども言ったように最近は、まったく理に適わない不当なことを言われることもありますが、そういうときこそ努めて心を落ち着かせ、言葉に気をつけて発言をするようにしています。意見を表明すべき時ははっきりと言いますが、決して人の憎悪を煽るような言葉は用いません。

私の主張は明確です。世界における「文化」の重要性――文化は政治よりずっと大切なものだということと、私たちのように文化に従事する人間が、決してそれを忘れてはならないということです。トロイア戦争が何年に行われたかという事実は分からなくても、ホメロスの作品は後世まで残っています。戦争が行われ、何万何億という人々が犠牲になりながらも、その記憶は薄れていく。しかし文化は残るのです。文化を担う人間は「今、この瞬間」を、人に与えられた最も高等な営み――「創作」という形にして残す使命があります。動物がいかに素晴らしく巣を作ろうと、それは本能がさせている行為です。しかし人間には高い知能があり、創作をする能力がある。

ところが、何かを破壊している人間は、その最も高等な営みである「創作」をなし得ません。壊しながら同時に創るのは不可能なのです。戦争という凄まじい破壊行為をする人間は、創作者の敵です。私は、すべてのことは話し合いで解決できると考えています。これまでの人生で二度離婚しましたが、二人の元夫とは別れた後も友人として付き合っていますから、話し合いで解決するのは得意と言っていいでしょう（笑）。そして現代の世界に最も必要なのは、やはり「話し合いの能力」だと思うんです。

――現政権は、プロパガンダやデマで国民の憎しみや怒りを煽っていますが、このような状態の国で暮らしていて怖くはありませんか。

ウリツカヤ　ちょうど昨日、私が参加する予定の、21日の平和行進デモに関してインタビューを受けてきたところです。そのなかで私はこう言いました――「平和デモに参加するのは、私が強く、勇気があるからではありません。むしろ臆病で、弱いからです。私は子供たち――私の子供や、あなたの子供や、皆の子供のために、戦争を恐れているからです。そのために私は、弱い者ができる、弱い者らしい行動に出ます――それが、叫び、訴えることです」と。

——なるほど。ところで話は戻りますが、やはり今リヴィウに行くと、あなたを非難する人々は一層その声を強めるでしょう。なにか嫌な目にあう可能性はありませんか。

ウリツカヤ　いま私に非難の声を浴びせている人々は、テレビで言っていることをそのまま信じてしまうような人たちです。あけすけに言ってしまえば、彼らはあまり学識もなく考える能力もなく、テレビのプロパガンダでゾンビ化してしまっているのです。私は、彼らを憎んではいません。それにもう 71 歳です。乳癌を患い、入院や手術もしました。自らの死を現実的に考えてもおかしくない状態にあります。だから「殺されるかもしれない」とか、そういったことはまったく怖くありません。可能性としてはあり得ますが、だからといって例えば、ロシアから出ていくつもりはありません。追い出されない限り、私はここに残るでしょう。

私はロシア語で書く、ロシアの作家です。血筋はユダヤ系で、宗教的にはキリスト教の教えが身近にある環境で育ちました。この三つは、今の社会において互いに共存できずにいる組み合わせです。そういう意味では私は少数派に属します。それもあって、私は社会における少数派にはいつも最大限の注意を払い、守ろうとしてきました。これが目的で、子供向けの本のプロジェクトを立ち上げたほどです [8]。

——少数派と多数派という話で言うと、今の政権を動かしているのもやはり「多数派」ということになりますね。プーチンの支持率はかなり高いでしょう。

ウリツカヤ　ええ、80 パーセント以上です。その意味でもやはり私は少数派ですね。文化的な少数派というか。ただ、文化人のなかでもやはり意見が合わないことが多くなりました。クリミア併合に賛成している人も多くいます。しかしあれが背後に武力をかざした一方的な「併合」であることは明らかです。私は 1943 年生まれで、戦争の記憶はありません。飢餓も知りません。幼い頃、わが家は貧しく、慎ましやかに暮らしていましたが、飢えを経験したことはありません。高等教育も受けることができたし、戦火のもとに暮らしたこともなければ、内戦や革命のような社会変動もなかった。おまけに人生の後半になって、自由に外国に行くことまでできるようになった。だからもしこのまま戦争を体験せずに一生を終えられたなら、それだけで幸せだと思っていました。ところが今、私の老年時代に、戦争という暗い影が差しています。モスクワに爆弾が落とされるわけではないにせよ、わずか数千キロ離れたところでは銃撃戦が行われ、ロシア人もウクライナ人も命を落としています。恐ろしいことです。

——今後はいったい、どうなるのでしょうか。

ウリツカヤ　予測は困難です。政治の今後は非常に暗いと思います。私個人としては、精神の要求する仕事を誠実にこなしていくこと、極力平穏に、争わずに生きることを目指しています。

——そうですね。しかしこれだけ憎しみの種が撒かれてしまうと、民族同士が再び人間的な、友好な関係に戻るのには時間がかかりませんか。

ウリツカヤ　ええ。そこはやはり「文化」の出番だと思います。リヴィウに行くのもそのためです。文化的な活動を強めていかなくてはいけません。私が中学高校や大学などによく講演に行くのも、読者と接する機会をなるべく増やすようにしているのも、すべてそのためです。頻繁に講演やイベントに参加するので、たまに「そういった活動は好きでやっているのですか」と訊かれることがあります。嫌いですとは言えませんが、本心を言えばもちろん家で本を書くほうが好きです。けれども最近は「文化」を支持する層がとても薄くなっている——ロシアやヨーロッパだけではなく、世界中でそ

うなのだと思いますが、それが私は非常に心配なのです。

こういうときこそ文化的な活動をする人間が、とにかく一所懸命に自分のできることをしなくてはいけません。私にできることは言葉を紡ぎ出すことです。そしてそれを人に伝えること。だから講演やイベントに参加するのです。それで世界を変えられるという確固たる自信はありません。けれども、もし文化が世界を変えなければ、近いうちに人類が自滅してしまうのは目に見えています。なぜなら現代の科学技術は、人類の良心や倫理でコントロールできるレベルを大幅に超えてしまっているからです。それが、人類が直面している最も重要な課題です。

――なるほど。ところで先ほどの話にもあったような、権力側が意見を異にする者を弾圧したり、「西側諸国は敵だ」というプロパガンダを量産したりといった現状は、ソヴィエト時代を彷彿とさせますね。ソヴィエト時代と現代を比べると、何か違いはありますか。

ウリツカヤ　大きな違いがあります。共産主義時代の権力者は共産主義者です。彼らには――それに対する評価や好き嫌いは別として、高い理想がありました。そして、少なくともその理想を追うという名目があった。ソヴィエトの根本には非常に高潔で人間的な理想があったのです。その理想がいかに歪められたかというのは、また別の問題です。なにもかもが歪められてしまった。けれども私は、ソヴィエトの理想そのものに嫌悪感は抱いていません。社会主義にも敵対心を抱いてはいません。ところが現在の政権を牛耳っているのは、冷笑的で貪欲な人々です。この差は非常に大きいと思います。ただ、冷笑的な人々だろうと、それなりにまともな国家を築くことができればまだいいのです。

しかし今の政府は反人間的な政府です。もっとも、私はどんな政府であろうと政府を好きになったことはありません、歴史の本を読んでいても思うのですが、どんな時代どんな場所に生まれていても、政府に対してなんらかの不満はあったでしょう。ユダヤ人らしい批判精神も影響しているのかもしれませんね。しかし、単に権力が嫌いというわけではありません。そうではなく、理想的な国家は最小限の機能を果たすに留まるべきだと考えているのです。国家がなすべきことは国境を守ること――とはいえここには現在さまざまな問題がありますが。それから税金を徴収し、それを医療、教育、社会保障のために使うこと。それだけです。

文化は国家の仕事ではありません。国家が文化に手出しをしてはいけないのです。現代の文化水準の低下の主因はそこにあります。現在の国家は、石油が生み出すお金だけで成り立っています。その国家が、ソヴィエト時代に私たちがたいへんな犠牲を払って生み出してきた文化的遺産を次々に破壊しています。彼らはなにも生みだしません、自分たちの豪邸を建てるだけです。

――権力に屈しない作家というのは、昔からロシアの知識人の最良の人々でした。しかし最近はそういった作家もどんどん少なくなっているようですね。ところで、検閲のほうはどうなっていますか。ソヴィエト時代と比較して。

ウリツカヤ　テレビやマスメディアに対しては非常に厳しい検閲がなされていますが、文学作品にまでは手が回っていません。文学作品に対し検閲がまったくなされないのは、ロシアではほぼ初めてのことです。ご存知のようにアレクサンドル・プーシキンに対する検閲は時の皇帝が自ら引き受けていましたし、ソヴィエト時代もずっと厳しい検閲がありました。しかし今、本を出すときに検閲はかかりません。存在するのはビジネスの掟で、それはそれでシビアな問題ですし、出版界が大衆の好みに左右され文化水準が下がる原因にもなっています。世界中で同じことが起きています。商業検閲とも

いうべき問題で、現代ではこれが政治的な検閲よりずっと大きな力を発揮しています。

——マスメディアに対する検閲はそんなに厳しいのですか。

ウリツカヤ　すべてのチャンネルが政府の監視下にあります。ただドーシチ[9]というチャンネルだけは、どうにかそれを回避しようとがんばっているようです。私はあのテレビ局の方針に全面的に賛成とは言えませんが、それでもほかのチャンネルに比べればずっとましです。

——最後に、いま書いている小説はどんな小説か教えていただけますか。

ウリツカヤ　祖父の手紙から着想を得たものです。[10] わが家には、祖父母がやりとりした手紙が保管されていました。私は、読んで失望するのが怖くて、ずっと読めずにいたんです。けれども手紙に刻印された年号である 1911 年から 100 年が経過したのをきっかけに、読んでみようと思いたちました。するとそれが、とんでもなく面白かった。私は人生で一度しか祖父を見たことがありませんでした。それなのに、祖父と私にはたくさんの共通点があったんです。それで私は、いったい自己とはなんだろうと考えました。大学で専攻していた遺伝学への興味とも繋がり、長編を書かずにはいられなくなったのです。『通訳ダニエル・シュタイン』[11] でもやりましたが、本物の手紙をそのまま引用する箇所もありますし、創作の要素も入ります。風景や物事の描写は少なく、人間の内面に光を当てた作品になると思います。

——ありがとうございました。

2014 年 9 月 4 日、モスクワのウリツカヤ氏の自宅で

（奈倉 有里訳・注）

Notes

1. ウクライナ西部の都市。文化的イベントが多く開催され、この町で行われる文学フェスティバルはウクライナで最も有名なもの。ロシア語読みはリヴォフ。
2. ウリツカヤは当時ペンクラブの副会長を務めていたが、この後、2015 年に退会を余儀なくされた。
3. モスクワ随一の規模を誇る本屋の壁など中心地の目立つ場所に、「裏切者」「国内に潜む敵」等の攻撃的な文句とともに、ウリツカヤの顔写真や戯画が印刷された巨大な垂れ幕が張り出された。
4. Наши ナーシ（「我々の（祖国）」の意）という青年団体に所属する人をファシストにかけて呼ぶ俗称。ナーシは 2005 年に創設。ウラジーミル・プーチンに対する個人崇拝の傾向が強い。
5. スペイン語の junta から。クーデターによる臨時の軍事政権や、陰謀組織などを指す。2014 年にウラジーミル・プーチンがウクライナ政府に対し用いて問題になった。
6. このほかに、ボリス・アクーニン（作家）、オレグ・バシラシビリ（俳優）、ユーリー・シェフチューク（ロックグループ DDT のリード・ヴォーカル）らの肖像も確認されている。
7. ドイツの *Der Spiegel* 誌に掲載された、エッセー「ヨーロッパよ、さようなら！」のこと。日本語訳は『すばる』2014 年 11 月号掲載、沼野恭子訳。
8.「うちの家族とよその家族」というプロジェクト。各分野の専門家が子供向けに異なる宗教、風習などの様々な家庭について説明。そのなかの「ホモセクシャル家庭」——二人の父親もしくは二人の母親のもとに育つ子供もいます、という記述が波紋を呼び、一部で禁書扱いにする動きが出るなど、現代ロシアの同性愛に対する厳しい世論を反映する形の騒動となった。
9. Дождь テレビ局。「雨」の意。ж の字を雨に見たてた「До///дь」のロゴを用いる。2011-13 年、選挙の不正に抗議する市民が起こした大規模なデモのとき、そのドキュメンタリーを放送して反響を呼んだ。
10. *Л.Улицкая*. Лестница Якова. 2015. АСТ. 最新作『ヤコブの梯子』（未訳）。2015 年の秋に発表された。
11. *Л.Улицкая*. Даниэль Штайн, переводчик. 2006.『通訳ダニエル・シュタイン』前田和泉訳、新潮社、2009 年。

ボリス・アクーニンとのインタビュー

ボリス・アクーニン Борис Акунин

1956 年生まれ、ロシアの小説家・日本文学翻訳家。本名グリゴリー・チハルチシヴィリ。モスクワ大学アジア・アフリカ研究所（日本史専攻）卒業。文芸誌編集部に務めるかたわら、現代日本文学の翻訳を手がけ、特に三島由紀夫を最初にソ連に紹介した功績で知られる。1998 年日本語の「悪人」をもじった筆名アクーニンを使って、歴史探偵小説「ファンドーリン・シリーズ」を書き始め、一躍人気作家に。ロシア随一の国際的人気作家で、世界 35 カ国語に翻訳されている。邦訳に『堕天使殺人事件』『リヴァイアサン号殺人事件』(以上沼野恭子訳、岩波書店)、『アキレス将軍暗殺事件』(沼野恭子・毛利公美訳、岩波書店)、『トルコ捨駒スパイ事件』（奈倉有里訳、岩波書店）、また本名チハルチシヴィリ名義の研究書に『自殺の文学史』（望月哲男他訳、作品社）がある。

――どこかのメディアで、あなたが「私は今ロシアで起きていることのすべてに、一切共感を持てない」という趣旨の発言をしているのを読みました。実際にロシアでは今、なにが起きているのでしょうか。

アクーニン　社会が病んでいる状態です。なにもかも政治に動かされている。中立でいるのは非常に難しいだけでなく、不謹慎なことにも思えるほど、政治が、いえ、社会全般が危機的な状況にあります。ロシアではずっと昔から、文化人は必ずこういった政治的状況に対し意見を述べなくてはならないという風潮がありました。また権力側からの文化人への圧力もあります。ですから今プーチンを支持している文化人のなかには、心から支持している人もいれば、恐怖心から支持している人もいます。こういったことが、社会の雰囲気を非常に悪くしているのが現状です。以前は仲の良かった者同士がそのせいで口をきかなくなることもあります。

私の意見を民主的だと言って支持してくれるような人にとっては、今のロシアは非常に生きづらい世の中になっている。権力に抗うこと自体には、私たちは慣れています。しかし問題は国民の大多数が私たちの側にはついていないということです。その理由は明らかで、テレビはどのチャンネルを回しても大量のプロパガンダを流しているし、大手マスコミも同じです。「ロシアは敵に囲まれている、西欧もアメリカもロシアを滅ぼそうとしている」という図式を作りだし、本来は最も親しい兄弟のような国ウクライナのことを、なぜかファシストだとかなんだとか、無茶苦茶を言っています。

それは当然、一般の人々に影響しています。私のファンでさえ、今は「小説家なんだから小説だけ書いて、政治に口出しをしないでください」と言ってくる。それも比較的ましなほうで、最悪の場合はヘイトメールを書いてよこします。

――いつからそんな状況になったのでしょうか。「第五列 [12]」「フンタ [13]」「ロシア嫌い（ルソフォビア）」といった表現が多用されるようになったのは……、クリミア併合以降でしょうか。

アクーニン　ええ、そうですね。

――現在、ロシア国民の 80 パーセントがプーチンを支持しているようですが、その理由をどうお考えですか。やはりプロパガンダのせいでしょうか。

アクーニン　現代社会には「テレビ視聴者」という名の大衆がいます。程度の差こそあれロシアだけ

のことではありませんが……。彼らは主にテレビのみから情報を得ていて、それ以外の時間は自分の興味のあることだけをやっている。これはごく普通のことですが、彼らにとって大事なのは家族であり子供であり仕事であり、ほかのことは基本的にどうでもいいと考えています。

しかしだからこそ、テレビから流れてくる情報、すなわち自分とは関係ない世界の話は、簡単に信じてしまう。なんとなくテレビをつけると、いつも「プーチンは偉大だ」「ロシアは偉大だ」「ウクライナは悪だ」「ヨーロッパもアメリカも日本も悪だ」と繰り返していれば、視聴者はなんとなく信じ始める。そこへもってウクライナでの残虐行為――その大半はありもしないでっちあげ映像ですが、そういうものが流れてくれば、今度は怒りが込みあげる。その後、ロシア政府に反対する人を映し出す。そうすれば、それはイコール「裏切者」ということになる、という仕組みです。非常に幼稚ですが、効果的でもあります。

――そういったことはソ連時代というか、スターリン時代さえ彷彿とさせますが、どうですか、当時と今を比較すると。

アクーニン　スターリン時代と比べるなら今のほうが断然ましです。今は少なくともロシアを出ていく自由がありますが、ソ連時代は不可能でした。

――銃殺もされないし?

アクーニン　ええ、まだ今のところは。基本的には国家に直接雇われているような仕事でもない限り、自由にものを言うことができます。それにインターネットという自由な空間もあるし、SNS もある。だから「自分と同じ意見を持っている人がいる、一人ではない」と知ることができます。例えば二週間ほど前に、ロック歌手のアンドレイ・マカレヴィチに対する糾弾が始まったのを知っていますか。彼は単にウクライナでコンサートをしただけだというのに。

――ええ、私もその件を追っていました。

アクーニン　私は Facebook で、「マカレヴィチを支持する人は " いいね " を押してください」という短い書き込みをしました。すると六万五千の " いいね " が集まったのです。私はとにかくアンドレイを支えたかった。彼はこの件でたいへん心を痛めています。ミュージシャンは作家よりもこういうことに傷つきやすいのです。

――私も真っ先に " いいね " しました。でも彼はいまどうしていますか。本当に裁判にかけられてしまうのでしょうか。

アクーニン　いえ、今は少し収まったようです、新しい標的が見つかったこともあって。その標的というのは、ディアナ・アルベーニナなんですが。

――彼女がどうしたんですか、歌手ですよね。

アクーニン　ええ。アルベーニナもウクライナについてなにか発言したようです。そのせいで今、各地で行われる予定だったコンサートが中止になっています。

――しかしミュージシャンがそれだけ困っているということは、作家はどうですか。例えば本の売り上げに影響が出るとか。

アクーニン　作家は幸い、かなり自由な存在です。現代ロシアの作家にとって、自分の意見を率直に表明するのは難しいことじゃない。ミュージシャンは、権力に嫌われてコンサートが開けなくなったら終わりです。ご存じだと思いますがロシアではＣＤの売り上げは存在しない[14]ので、彼らはコンサートの収入だけで生きています。コンサートがなくなったら、メンバーにさえお金が払えなくなって

しまう。映画監督やプロデューサー、ジャーナリストもそうです。職を失ったり、部下にお金を払えなくなったりする。ところが作家は、書いた本を出すだけでいい。明日、私の新刊が発売されます。『ロシア国家史』第二巻、というたいへん退屈な、分厚い本ですが、ロシアじゅうの本屋に並びます。初版、なんと 10 万部ですよ。

――では今の状況は、著書の売り上げには影響がないということでしょうか。

アクーニン　基本的に影響はまったくありません。唯一変わったのは、以前はよく私の小説を元に映画が撮られていましたが、今は撮られなくなったことです。ああいう映画は常に国家に左右されています、まあ映画など撮られなくても別に構いませんが。

――ところで、いまの社会の攻撃的な雰囲気のなかに、反ユダヤ的な要素はあるでしょうか。昔から、ロシアの最良の知識人のなかにはユダヤ系の人が多くいますが……。

アクーニン　ええそうですね。ただ、今に限って言えば、ユダヤ系よりもグルジア系やウクライナ系の人のほうが攻撃対象になっています。確かに「裏切者のユダヤ人」と書かれた垂れ幕もあったようですが、「裏切者のグルジア人」と書かれていたっておかしくない、そういう対象は、ころころ変わるんです。排他的になった人々は、反ユダヤというより自分たちと異なると思う者すべてを嫌います。彼らが好いている民族なんてありませんよ。

――詩人のレフ・ルビンシュテインはどうしていますか。やはり困難な状況にあるのでしょうか。

アクーニン　ちょうど昨日、彼と会って酒を飲み交わしたところですよ。

――私はよく彼の Facebook の投稿を読んでいるのですが、とても鋭くて面白いことを書いているので、いつも " いいね " してるんです。

アクーニン　彼は私よりひとつ上の世代で、1947 年生まれです。ソ連時代は、出版できない詩を書いて仲間内で読みあっていた、アンダーグラウンド詩人でした。今のような状況は、彼にとっては若い頃に逆戻りしたようなものなのです。だからこんな状態でも、国を出ていくつもりなどまったくない。またあの時代に戻ったか、というほどのものです。

――収入源はあるんでしょうか。

アクーニン　インターネットで「グラーニ」というサイトをやっています、ご存知ですか。

――あれで収入になるんですか。

アクーニン　少しはなるようです。ただしあのサイトはロシアでは禁止されて、国内では読めなくなってしまったんです。私のブログもそのうち閉鎖させられるかもしれませんね。

――しかしいったい、この先はどうなるのでしょうか。

アクーニン　革命……、クーデターが起こるかもしれません。考え得るなかで最良の展開がクーデターです。二～三年前に大規模なデモが行われましたが、あのデモは革命のような激しい抗争が起きないように、平穏な政権交代が行われるように行ったものです。しかしもはや、そうはいかないような危機になってきている。ですからこの先には、かなりたいへんな事態が待ち受けているのではないかと危惧しています。

――しかし、いまのところ革命の予兆は見当たらないようですが。

アクーニン　そうですね。しかしお金が尽き、年金や給料が滞り、インフレが始まり物価が高騰すれば、社会の空気は一瞬で変わります。そうなれば平和的な政権交代などもはや不可能です。彼らはすべてを踏みにじり、破壊するでしょう。それがいったいどういう形をとるのかは想像もつかない。

私は非常に恐れています。核兵器を大量に抱えたこの大きな国、多くの異なる民族が互いに反発し合うこの国で、いったい何が起こるのか。なにか奇跡でも起きない限り、先行きはたいへん暗いと思います。

——プーチンを支持している文化人で影響力のある人はいますか。映画監督のニキータ・ミハルコフでしょうか。

アクーニン　ミハルコフに今それほど影響力があるとは思いません。それよりはテレビに出ている有名な俳優やアナウンサーのほうがずっと影響力があるでしょう。あとは一部のミュージシャンも。

——作家はどうですか。まともな作家はたいてい反プーチン派のようですが。

アクーニン　まともかそうでないかというのは、主観的な判断です。私がまともじゃないと思う作家でも、誰かから見ればまともかもしれない。ザハール・プリレーピンは単にプーチン派というのとはちょっと違いますが、現在の帝国主義的な、好戦的な政治を支持しています。しかし現代ロシアにおける作家の影響力を過大評価してはいけません。時代は変わり、作家が社会的に大きな影響力を持っていた時代は終わりました。ペレストロイカの時代とは違うのです。私たちは自由に発言をすることができますが、その声に耳を傾けてくれる人はそう多くありません。

——実は今回、最近ロシアで起こっていることを知りながらモスクワに来るのは、多少不安でした。しかし来てみると、思ったよりは大変ではないというか、表面上は静かですね。

アクーニン　これは非常に不思議なことです。私は数日前、キエフに行ってきたばかりだという記者と話をしましたが、キエフも同じだというのです。人々は何事もなかったかのように普通に生活し、カフェやレストランで食事をしていた、コンサートや演劇なども通常通り行われていた、と。まるで戦争など行われていないように。みんなが戦争のことを考えているだろう、話しているだろうと思ったら、そうではないのです。

——今はどんなものを書いていますか。現在の状況は作品にも影響するのでしょうか。

アクーニン　私が今いちばん力を入れているのは創作ではなく、『ロシア国家史』です。大きな計画で、全体の執筆期間は十年を予定しています。これまでロシアでは常にかなりイデオロギー的傾向の強い歴史教育をしてきました。歴史は常に史実を知るためではなくプロパガンダの材料にするために利用されてきた。だから私はできるだけそういう要素のない歴史の本を書きたかったのです。そして何が史実で、どういった要素を国家がプロパガンダの為に捏造したのか、分析したかったのです。去年第一巻を出し、今二巻目が出ます。全部で八巻になる予定です。

——中世から現代までということですか。

アクーニン　いえ、最初から——つまりロシアという国家の起源から、二十世紀までです。そして各巻に歴史小説がついています。読者が、ただ事実の羅列を読むだけではなく、当時の暮らしを感じとることができるように。私はこの本の執筆に熱中しています。もちろん、今日のロシアで起きていることは重要です。しかしだからこそ私は、ロシアの歴史を書こうと思ったのです。私自身、理解したいのです——ロシア国家とは何か、なぜ現在のようなロシアになったのか。

——探偵小説ファンドーリン・シリーズの翻訳は外国の読者にもなかなか好評ですが、そのロシア史の本は外国人には少々難しいでしょうか。

アクーニン　もちろん、外国語に翻訳する必要はありません。これは自分が書きたいから書いているだけです。私は少し前から、自分で面白いと思うものしか書かなくなりました。歳もとったし、興味

の対象も変わった。去年か一昨年、私は初めて真面目な小説を書きました。おそらく今後も、大衆向けではない小説を書くと思います。自分のために書くような小説です。流行ろうと流行るまいと、そんなことは眼中に入れずに。

――それはチェーホフの歩んだ道に似ていますね。彼もやはり、大衆向けの作品でスタートし、後になってもっと真剣な、重い小説を書くようになったでしょう。

アクーニン　しかしチェーホフは若くして死んだ。私はもうチェーホフが死んだ歳よりずっと上です。

――それは私も同じです。チェーホフは確か 44 歳で亡くなっていますね。

アクーニン　私はその歳では、作家になってすらいなかった。ようやく小説を書き始めていた頃です。

――ところで、ロシア在住の現代作家で他に面白い人はいますか。

アクーニン　私はもう長いこと小説を読んでいません。妻のエリカはよく読んでいて、たまに面白い作家がいると教えてくれますが。いちばん最近だと、ザハール・プリレーピンの『僧院』という本[15]です。最初に言った通り、現在のロシアでは政治的な対立が非常に深まっていて、その意味ではプリレーピンは私とは反対の陣営にいる人間です。私は彼の主張には絶対賛成できません。しかし小説のほうは、なかなかいい作品を書きます。

――それでは最後の質問です。ロシアの作家は社会を先導する、人々の思想的リーダーであるという時代はもう終わったのでしょうか。

アクーニン　おそらく、終わったのだと思います。しかしある意味、終わってよかったのです。作家があまりにも多くの任務を負う――作家が思想家であり経済学者であり政治家でもあるような社会というのは、発展が未熟な社会ともいえるからです。発展した社会においては、哲学は哲学者が、経済は経済学者が専門にやっています。そして作家は、文体や言葉を考える。そういう意味では、作家という職業は二十年ほど前に比べて、面白さは減ったぶん、普通の状態に近づいたのだと思います。

2014 年 9 月 5 日、モスクワのレストラン・ダルバジで

（奈倉有里訳・注）

Notes

12. 本来は味方であるはずの集団、国家などの内部に存在する敵を指す言葉。
13. 注 5 を参照。
14. 海賊版が出回り不法ダウンロードも多く、楽曲をリリースすることによって得られる収入はほとんどない。
15. *Захар Прилепин*. Обитель. 2014. ACT. この年、ボリシャーヤ・クニーガ賞の一位を受賞した

アンドレイ・マカレヴィチとのインタビュー

アンドレイ・マカレヴィチ Андрей Макаревич

1953 年生まれ、ロシアのミュージシャン、歌手、作詞作曲家。1969 年にロックバンド＜マシーナ・ヴレーメニ＞（「タイムマシン」の意味）を結成。このバンドは初期ソ連ロックシーンを切り開いた伝説的存在で、いまでも活動を続けている。ソ連ロックの最高のスターの一人として絶大な人気を誇り、数々の栄誉賞や勲章を受けてきた。グラフィックアートやエッセイも手掛け、テレビ番組の司会も務めるなど、多面的な活動をしている。

——今日はお忙しいところお時間をとってくださり、ありがとうございます。日本を含め、ロシア研究者にとって、あなたは伝説的な大スターなので、お会いできるというのは、なにかこう、現実ではないような感じがします。マカレヴィチさんは 8 月半ばに東部ウクライナのスヴャトゴルスクという町のコンサートで、歌を歌いましたね。それが思いもよらず激しい非難を巻き起こした。こんなことがなければ、私もご連絡差し上げたりする勇気はなかったと思います。

まず、一番新しい出来事について質問させてください。つい先日、9 月 6 日だと思いますが、マカレヴィチさんは「俺の国は頭がおかしくなってしまった」[16] という新曲を発表されました。これは現在自分を取り巻いている状況への反応だと考えていいのでしょうか。

マカレヴィチ　これまで書いたどの曲にも私の態度は反映されています。ただし、確かにネット上ではこの曲はそう呼ばれていますが、私がそう名づけたわけではありません。

——でも、歌詞にそういう表現がありますね？

マカレヴィチ　確かにそういうフレーズはありますが、この歌の中でそれが最も重要なことなのではありません。一番大事な主張はやはり「誠実な人間にならなければならない。とりわけ厳しい状況下においては」ということだと思います。ただし、タイトルはまだ決めていない。いつも私は曲に名前をつけるのにとても時間がかかるのです。この曲をどう呼ぶかは、まだわかりません。

——この曲の最後に「選択の時がきたのだ」とあります。これはどのように受け取れば良いのでしょうか。

マカレヴィチ　周囲の状況が活発になればなるほど、世界が二極分解すればするほど、自分がなににたいして賛成し、なににたいして反対するのかを明確にする必要があるということです。

——ソ連時代末期に大ヒットした「曲がり角」[17] という曲も、時代の変化というか、やがて来るペレストロイカを予感させる内容でしたね。

さあ新しい曲がり角だ、エンジンがうなる
その先に何があるのか——転落か飛翔か、深い淵か浅瀬か
分かるわけないさ、曲がってみなければ

マカレヴィチ　もう、それは苦笑するしかありません。信じて欲しいのですが、「曲がり角」という曲

を書いた時、私はあの歌詞がなにか社会的な意味に結び付けられるなんて、思いもよりませんでした。私たちは踊れる曲として作っただけなのです。でも、時代の空気が尋常じゃないときときは、聞きたいと思うものが聞こえてしまうのです。そこに書かれていないはずのものでさえも。

――でも、やっぱり「私の国は頭がおかしくなった」という曲は、あなたがウクライナでコンサートを行ったあとにこの国で起きた騒動に対する直接的な返答であるように、私には思われます。実際、コンサートはどんな感じのものだったのでしょうか？　なぜこれほどまで過激で思いがけないリアクションが国粋主義者側から寄せられたのでしょうか？　彼らは、これまであなたに与えられた公的な「国民芸術家」といった名誉ある称号をすべて剥奪して裁判にかけろとさえ主張しているわけですが。

マカレヴィチ　私にもまったくの謎です。というのも、少なからぬロシアのアーティストたちがウクライナに行き、コンサートを行っているわけですが、これといって事件にはなっていません。結局のところ、ウクライナと戦争をしているわけではないのですし、ましてやウクライナという国は我々にとって兄弟であり、友であって、これまでずっとそう考えられてきたわけです。ドネツクからの難民の受け入れをしているボランティアの人たちから、電話をもらいました。難民はスヴャトゴルスクの近郊に集められていました。そこには古い修道院があり、周囲には青少年のサマー・キャンプの拠点や休暇村などがあって、難民たちが来ていました。そこで歌ってくれないか、と依頼されたので、「もちろんいいとも、お安い御用だ」と答えたんです。そういうわけで、ドネツクから来た難民の子供たちのためにいくつか歌を歌ったわけです。そのなにが犯罪行為だというのか、私にはいまだにわかりません。

――そうですね、人道的行為というべきであって、だからこそ、私たちにも奇妙に思えます。それがどうしてこれほどにも過激な反応を呼んだのか……。

マカレヴィチ　私こそ、まったくわけがわかりません。そうでしょ？

――このようなリアクションがあるとは、まったく予期していなかった？

マカレヴィチ　国が異なる集団に二分されると、内なる敵探しが始まるものです。必ず誰かが内なる敵にされてしまう。とても都合が良いからです。もちろん、それは誰もが知っている人を敵に仕立て上げなければならない。それで彼らは私に目を付けたというわけです。

――エドゥアルド・リモーノフの[18]記事に対してなにか言いたいことはありますか？

マカレヴィチ　言いたいことはすべてもう書きました[19]。いや、その手の記事が他にもものすごくたくさんあったんですが、無視するように努力していたんです。でもあれはあまりにもひどい侮辱だったので、つい反応してしまった。

――あの国会議員は、名前を思い出せないのですが、フョードロフとかいった？

マカレヴィチ　いや、そんなの思い出したくもないですよ。

――彼はいまだにあなたからすべての栄誉賞と称号[20]を剥奪せよと言っているのでしょうか？

マカレヴィチ　さあ。そんなフョードロフとかいうのになんの興味もありません。

――彼はそういうことを発言したのは、今回の事件で突然だったのですか？

マカレヴィチ　彼には今まであったこともないし、会いたいとも思いません。どんな人物かなんてまったく興味ありませんね。

――ちょっと微妙な質問なのですが……マカレヴィチさんはそもそも政治に対してどのようなスタンス

を取ってきたんでしょうか。従来のあなたの音楽活動を拝見していると、いつも政治からはある距離を置いていたような気がするのですが。

マカレヴィチ　私が夢見ているのは、政治のことを気に掛けずに生きていける国に住むことです。なぜなら、政治家というのは、まともな暮らしができるように民衆が選んだ人たちなわけですから。彼らが与えられた課題をきちんとこなしていれば、私は彼らの名前をわざわざ知る必要がないはずだ。彼らが課題をきちんとこなせていない場合、つまり、私たちの生活がどんどん悪くなっていくように見えるにもかかわらず、生活がどんどん良くなっているかのような嘘を吹き込もうとする場合、なにか違うぞ、となれば、そうはいきません。

——最近とみにご自身の意見を公にされる機会が増えてきたように思いますが。

マカレヴィチ　そうせざるを得ないのです。私自身はあまり首を突っ込みたくはない。音楽に没頭している方が楽しいのですから。

——ロシアには特に作家たちが権力者を批判するという伝統があるわけですが、音楽家たちも時にはそのような社会的な役割を引きうけるべきだとお考えですか?

マカレヴィチ　そういうのは主として 1980 − 90 年代のことでしょうね。当時はそうでした。今はそういうことは大分少なくなりました。

——日本人にとってはとてもわかりにくいことなんですが、ロシアは民族が複雑に入り組んでいます。あなたもベラルーシのご出身ですね?

マカレヴィチ　父はベラルーシ出身で、母はユダヤ人です。ですから、私はユダヤ的な考え方によればユダヤ人だし、ロシアの規定によればベラルーシ人です。ロシアでは民族が父系で決まり、ユダヤでは母系で決まるので。まあ、私はインターナショナルな人間、国際人ですよ。人間を民族で分けてはならないと思います。血統で分ける犬じゃないんだから。我々は人間なんですから。信仰について言えば、それはあくまで個人が選択する問題でしょう。でも、私は宗教的な人間ではないので、信仰についてあまり悩んだことはありません。

——では、ウクライナ人とロシア人とを境界で区切ってはならないとお考えですか?

マカレヴィチ　もちろんですよ。ロシアとウクライナとはあまりに混ざり合っている。ウクライナにも民族的なロシア人が大量に住んでおり、ロシアにも南部にはたくさんのウクライナ人が住んでいます。ソ連時代の共和国間の国境は状況によって変わりうる相対的なものであって、明確な意味での境界線はありませんでした。ごく最近までそうでしたし、今だって私たちはウクライナに飛ぶのに国内と同じでヴィザなど必要ありません。それにいままでこれほどすぐそばで暮らしていた身近な民族同士が突然対立するなんて、あまりに酷すぎる。そんなことになったら、ずっと後々まで尾をひくし、生産的ではない。

——ユダヤに関する問題といえば、このところ、「ユダヤの第五列」[21] という不愉快な表現が広く使われるようになりましたね。

マカレヴィチ　ご存知でしょうが、混沌とした時代にはいつもロシアでは、いや、ロシアだけではなく、ドイツでも、どこでもナショナリストや反ユダヤ主義者たちがぞろぞろ出てくるものです。みんな調子が狂ってしまう。ですからこの手のことにはまったく驚きません。

——このような状況はすぐに終わるとお思いですか?

マカレヴィチ　お分かりでしょうけれど、すべてには終わりがあるのです。私たちの命も含めてね。で

も、このような事態はできる限り早く終わってほしいと思いますね。ですから、今ちょうど始まった協議[22]に、とても期待しつつ注目しているのです。これは、すべてを止めるためにようやく踏み出された現実的な第一歩なのですから。

――このすべてはいつ終わると思いますか？　どのような形で？

マカレヴィチ　悪い終わり方にならないよう、神に祈りたいです。第三次世界大戦の開戦につながり、その原因がロシアだなんていうことにはならないでほしいと思っています。

楯岡　ソ連時代の危機的な状況と今とでは、何か違いを感じていますか？　それとも同じことの繰り返しだと思いますか？

マカレヴィチ　いや、違いはもちろんあります。ソ連末期には……私は 1930 年代を知らないので、もしかしたら当時はちょうど今と同じ雰囲気だったのかもしれませんが。1970 － 80 年代には、もう誰もソ連政権を信用していなかった。テレビが伝えることは嘘ばかりだ、ということをみんな知っていました。みんなうんざりしながらそれらを聞き、こっそりと「ヴォイス・オブ・アメリカ」[23]の放送を聞き、サムイズダート（非合法地下出版書）を読んで、消極的ながらもその状況に抵抗していたわけです。消極的ですけれどね。

ところが今はもろ手を挙げてわれらが大統領やその政策を歓迎する人たちがかなりいる。確かに彼らは知的エリート層ではないかもしれない。でも少なくとも彼らは存在しているのです。そのことがソ連時代との大きな違いだと私は思います。

楯岡　日本でも戦争へと向かう力が幅を利かせています。

マカレヴィチ　世界中どこもですね。

楯岡　最近、あなたは大統領に公開書簡を送られましたね。ロシアには著名なアーティストや作家が王様や首領に直訴の手紙を書くという伝統があるような気がします。

マカレヴィチ　もちろん、私の手紙を読んだからといって、大統領がすぐさま私に返事を書いたり、翌日に政策のすべてを変えたりするとは思っていません。でも、なにかが間違っているとしたら、私はそのことを言う義務があると感じるのです。もし黙ってしまったら、気に病みながら過ごさなければなりませんからね。では誰に訴えるべきなのか？　もちろん、一番中心にいる人物にです、その人がすべてに責を負っているのですから。

――ということは、やはりそのひとりの人物に依存しているということでしょうか？

マカレヴィチ　（うなずく）

――では、最後の質問です。ご自身の活動についてお伺いします。マカレヴィチさんはとても多才な方です。本も書かれるし、料理もされる、音楽の分野でも今、クレオール・タンゴ[24]をやっていますね。

マカレヴィチ　ええ、ジャズもね。グループで明後日、ブルガリアのジャズ・フェスティヴァルに行くのです。最近はジャズ音楽に興味があって。ロック・グループ＜マシーナ・ヴレーメニ（タイム・マシン）＞も、45 周年になりますが、健在ですよ。

――ひとりの人間がどうしてこんなに多岐にわたる分野で活動する余裕があるのでしょうか？

マカレヴィチ　とにかく細かく計画を立てて余すことなく時間を使うことです。日本の方なら良くお分かりになるのではないですか？　手帳に半年先まで真っ黒に予定を書きこんでいます。そうでなければ、今やっていることの半分もできないでしょうね。

――なるほど。ありがとうございました。いつかまたぜひ日本にいらしてください。

マカレヴィチ　日本には本当にまた行ってみたいです。経由地としては日本に何度も寄っているんですよ。水中の世界、つまり海をテーマにした映画を撮っていたことがあるんです。その時、オセアニアに飛ぶのに日本経由で飛んでいました。とても楽しかった。また行きたいですね。

2014 年 9 月 9 日、モスクワの音楽スタジオで

（ 楯岡求美訳・注 ）

【参考】

マカレヴィチ作詞作曲「**俺の国は頭がおかしくなってしまった**」（＊）

歌詞全訳 (沼野充義訳)

生まれるとき祖国を選ぶことはできない
そして永遠にこの糸を断ち切ることもできない
俺の国は戦争に行ってしまった
俺はそれを止められなかった

権力を甘く貪るやつもいれば、囚人か乞食にでもなるしかないやつもいる
でも俺はこの痛みに打ち勝つことができない
俺の国は頭がおかしくなってしまった
でも俺は自分の国を助けることができない

いったい何ができるのか、どうすればいいのか
今や何もかもが逆さまだとしても
後光に照らされ羽根を生やす必要はない
ただクソにならなければいいのさ

確かに分かっているのは
選択の時が来たということだけ
クソにならないと心に決めたなら
生きるのも、死ぬのも簡単さ

＊この曲は一般にはこのタイトルで知られているが、インタビューの中でも強調されているように、マカレヴィチ本人はそれは自分のつけたタイトルではないと主張している。

Notes

16. この歌の歌詞は、インタビューの最後に掲載する。

17. マカレヴィチがリード・ヴォーカルを務めるロックバンド「マシーナ・ヴレーメニ」の曲。歌詞はマカレヴィチ。1979 年から一年以上ヒットチャートの上位を占め続けた。2000 年に＜ナーシェ・ラジオ＞が作成した 20 世紀ロシア・ロック・ベスト 100 のリストの中で 4 位を占める歴史的名曲である。

18. 1943 年生まれ、元アメリカに亡命していた作家。ロシア帰国後、政治活動に携わり、過激な国粋的共産主義政党「ナショナル・ボリシェヴィキ党」のリーダーとして活躍。ネオ・ファシストと見なされることが多い。『イズベスチヤ』紙 2014 年 8 月 18 日付に「マカレヴィチはなぜ罰せられねばならないか」と題した記事を寄稿、マカレヴィチがウクライナ側の占領軍のために歌を歌い、敵を助けロシアを裏切った、と非難した。http://izvestia.ru/news/575417

19.『スノッブ』誌（ネット版）2014 年 8 月 21 日付に皮肉をきかせてリモーノフを揶揄する「リモーノフへの公開状」を掲載した。非常に多くの反響があった。https://snob.ru/profile/5134/print/79999

20. マカレヴィチは「ロシア・ソヴィエト社会主義連邦共和国功労芸術家」「ロシア連邦国民芸術家」などの栄誉賞を授与されている他、2003 年には勲四等「祖国への功労」章を受けている。

21.「第五列」はスペイン内戦期に使われた言葉で、一般に身内の中の裏切り者を意味するが、最近のロシアでは、現状に批判的な意見を表明しているユダヤ系文化人に対して、「ユダヤの第五列」というレッテルを貼る事態が増えている。

22. 2014 年 9 月 3 日、電話での会談後、ロシアのプーチン大統領がウクライナのポロシェンコ大統領に対し停戦案を提示。停戦協定が結ばれるも、すぐに破られてしまった。

23. アメリカの国営国際放送。1942 年にドイツおよび日本占領地を対象として放送を開始。1947 年からソ連圏に向けて放送開始。各国語で放送されている。

24. ユダヤ系のタンゴ・ミュージック。マカレヴィチはイディッシュ語とロシア語とで歌っている。